

アチェにおける自然災害と博物館

— 現実と再現されたもののスペクタクル —

齋藤 千恵¹

要旨

本論は、2004年インド洋津波の被災地であるインドネシアのアチェ州に設立された津波博物館の展示の真正性について論じる。バンダ・アチェ市に設立された津波博物館は、学校教育の中にも組み込まれ、防災・減災を目的に、展示の改良を重ねている。この改良の中で撤去された展示物がある一方、新たに加えられた展示物も存在する。展示を通して、被災のリアリティを伝えようとしているが、その一方で、リアリティを再現しているものの、スペクタクルとして受け止められるものもある。

キーワード

自然災害，ダークツーリズム，博物館，死，真実性

1. はじめに

2004年インド洋津波被災地の一つであるインドネシアのアチェ州（スマトラ島）では、被災の翌年から津波観光が始まった。2005年以降、現在に至るまで、この津波観光に組み込まれているスポットでは建設・整備が繰り返され、現在では、復興過程において見られたものとは異なったものとなっている。本論で論じる津波博物館も、津波観光スポットの一つとして、現在に至るまでその展示にはさまざまに手を加えられている。

2009年に州都バンダ・アチェ市に開館した津波博物館では、開館当初の展示に様々な展示物が加えられてきた。一方、2011年にリニューアルオープンした際に、見られなくなった展示もある。それまで、来館者の注目を集めていた津波犠牲者の遺体の写真は撤去され、津波災害を再現したジオラマや、地震や津波に関連したアニメーションプログラムといったものが加えられてきた。こうした変化を経た展示は、来館者にどのような印象を与えるだろうか？本論は、ダークツーリズム論を端緒に、これらの展示の変化に関して、真正性という観点から論じていく。

インド洋津波は、史上最大の自然災害の一つに数えられた大きな被害を出した災害であり、インド洋沿岸の複数の国や地域に重大な影響を及ぼした広域災害である。中でも最も深刻な被害を受けたのがスマトラ島の北部に位置するアチェ州であった。それは、1970年

¹ 国際人間科学部国際学科

代に始まった GAM (自由アチェ運動) とインドネシア軍の間の、武力を伴い多くの犠牲者を出していた紛争を停止させるほどの打撃をアチェにもたらした。死者・行方不明者は、東日本大震災の約 10 倍を数えた¹⁾。

アチェを襲ったのと同じ津波は、リゾート地として有名なプーケットも襲い、多くの観光客が犠牲となった。この様子は、アメリカ人観光客により撮影され、そのビデオは、様々な国の報道番組で繰り返し流された。そのため、世界的に注目され、欧米人にとっても自分が観光客として巻き込まれたかもしれない災害として覚えられたのであった²⁾。

津波により深刻な打撃を受けたアチェには、様々な国や地域から援助が訪れた。2005 年には、400 以上の団体や機関がアチェ州で援助を行っている³⁾。援助団体の職員やボランティアたちに加えて、ドナーや研究者、その他大規模自然災害に関心を持った人々が、被災地を訪れた。多くの人々が被災地を視察した。こうした現実を受け、復興と経済発展のため、アチェ州政府は、被災翌年から津波観光を開始したのであった。といっても、当初は、津波の爪痕を人々がそれぞれ訪れていただけであった。復興過程において、津波の爪痕のいくつかのものが、津波観光スポットとして整備されていった。その一方で、2014 年までは、仮設住宅が被災地には残っており、また、撤去されないまま全壊家屋などが放置されている場所もあり、津波観光スポット以外においても、津波被害は見学できたのであった。

1.1. ダークツーリズムと真正性

死を扱った観光をダークツーリズムと呼ぶことが、近年多くなった。アチェの津波観光もしばしばダークツーリズムと呼ばれる。津波観光の仕掛け人の一人である、元アチェ津波博物館長のラマダニ自身も、津波観光をダークツーリズムと呼ぶ。しかし、学術的な分野においては、何がダークツーリズムであるのかは、多様な議論が存在する。Light⁴⁾によれば、ダークツーリズムというカテゴリーには、死や災害の他に、気味の悪いものも含まれるようになり、ダークツーリズムはかなり広範な対象を含む観光となっている。

更に、何が、誰にとってダークなのかという基本的な疑問もある。Jamal と Leo⁵⁾は、ダークツーリズムと冠した観光地が、誰に対しても「ダーク」であるわけではないと述べる。こうした観光地が意味するところは、個々の観光者やホストにより異なるのである。用語の定義に関する問題は、現在のダークツーリズム論における大きな問題となっている。様々な対象を含め、様々な観光地がダークツーリズムの観光地とされる中で、本論は、アチェにおける津波観光の一側面を明らかにするために、Lennon と Foley⁶⁾のダークツーリズム論を参考にしようとする。

ダークツーリズムについて論じられる時、その先達としてしばしば Lennon と Foley⁶⁾の名が挙げられる。Lennon と Foley は、ダークツーリズムを、死や災害、残虐性を商品化する観光であり、その対象は、現在生きている人の記憶にある事件や出来事に限定されると述べる。つまり、19 世紀以前の様な遠い過去に起こった事件や歴史的出来事を対象とは

しないのである。更に、Lennon と Foley は、この観光では、近代性に対する不安が感じられることをその特徴の一つとして挙げている。この近代性に対する不安は、例えば、ホロコーストの場合、虐殺に用いられた革新的な技術や合理的な計画性、タイタニック号沈没においては、無謬とされた科学に対する不安、ケネディ暗殺事件では、リベラルな民主主義に対して与えた衝撃である。

こうした不安をもとに構成されるダークツーリズムは、商品化されたスペクタクルであり、出来事が起こったその場所あるいは別の場所での再現であり、コピーである。後近代に特徴的な観光形態であるのだ。こうした議論は、観光文化に関しての議論に常に付きまとう真正性の問題と関連している。これに関して、Lennon と Foley は、当該観光地を訪れる観光者を対象にした調査が必要であるとしている⁷⁾。

観光をテーマにする研究において、真正性は、しばしば問題になり、それに関する議論がいくつも存在する。ブーアスティンは、疑似イベントの概念を観光に適用する⁸⁾。疑似イベントとは、誰かに企まれ、再現されるために仕組まれたものであり、これと、現実との関係は不明確であるが、「自己実現の予言」として創り出される⁹⁾。ブーアスティンのこうした議論に対して、MacCanell は、観光者は、自身がしている経験がオーセンティックかどうか、知りようがないもののオーセンティックな経験を望んでいると述べる¹⁰⁾。つまり、観光者にとってオーセンティックなものは、必ずしもオリジナルであったり、リアルなものではないのである。

これに関して、Bruner は、真実性を4つに分類する。一つはオリジナルではなく、そのレプリカではあるが迫真性のある説得力のあるもの、二つ目はオリジナルに忠実なコピー、三つめはオリジナルそのものである。四つ目は権威づけのため真実性を持ったものである。博物館における展示は、上記のどれか、あるいは、複数のタイプに当てはまるであろう。こうした分類をする一方で、Bruner は、シミュレーションという視点から観光を論じるポストモダニストの議論を、一元的なものと批判し、観光者の解釈の多様性やツアーの過程において生じる解釈の変化について論じている¹¹⁾。

同じく博物館の展示についての真正性を論じる Cohen¹²⁾は、ダークツーリズムに注目している。彼は、悲劇が起こった場所とは離れた地域に位置する博物館においても、真正性は提供できると述べる。Cohen は、悲劇があった場所(*in situ*)とその経験についての表現がある場所(*in populo*)を区別し、エルサレムにあるホロコースト博物館の教育的なセミナーに関して真正性を論じた。*in populo* であるエルサレムの博物館が真正性が欠けるかといえばそうではなく、*in situ* と *in populo* の間には相互影響があり、*in populo* は、訪れる人々にとって悲劇があった場所に関連した事柄に対する代替として機能し得ると述べる。ダークツーリズムにおいて、出来事が起こった場所に位置しない博物館の展示も、真正性を提供するのである。しかし、ダークツーリズムが対象とする出来事全てに Cohen の議論は当てはまるだろうか？

Lennon と Foley が述べる様に、ダークツーリズムの対象となるものは、死や残虐性、災害の内、我々の記憶に残る出来事で、耳目を引く様な出来事であるだろう。そうした出来事は、マスメディアにより広く報道され、出来事自体が注目を集めている上に、メディアにより視聴者の関心をひくように組み立てられ伝達されている場合が少なくない。また、人々の関心を引く特異な出来事ではあるが、映画やテレビドラマなどの中ですでに人々が見たことがある様な出来事もある。こうした出来事を扱うダークツーリズムの場合、出来事自体がどのように表現され、扱われるのか。現実的よりもむしろ映画のワンシーンの様なスペクタクルに見えてしまう場合もあるのではないか。本論では、歴史的な大自然災害である 2004 年インド洋津波をテーマにするインドネシアのアチェ州に設立された津波博物館の展示を巡って、津波という災害がどのように表現され、展示されてきたのか、現実とのズレや被災地の人々の受け止め方に関して論ずる。

2. 津波博物館の展示

津波博物館は、2009 年に開館した。その外観は、近代性とともなアチェの復興の精神的側面も示している。アチェ文化とアチェの人々の精神力、津波と防災という要素が取り入れられているのである。博物館の建物はアチェの高床式の伝統的家屋に似せてあり、その壁面は、アチェ文化において力を表す舞踊をモチーフにした装飾がほどこされている。屋上は津波の波の形で、尚且つ、津波の際には避難ができる様に作られている。津波博物館の目的には、防災・減災という側面が強調されている。

2010 年に筆者が津波博物館を訪れた際には、開館したというものの、博物館は未完成であった。現在では、音が反響し壁に水が流れるらせん状の狭い通路を通り津波の追体験をした後、被災時の様子を写す画面が乗った台がいくつもある暗い部屋や壁面いっばいに犠牲者の名前がある慰霊空間に入る。2010 年当時は、らせん状の通路にはまだ水は流れておらず、被災映像のある部屋に映像はなかった。慰霊スペースには、少数の犠牲者名しかなかった。津波博物館は、開館後も完成に至る過程を歩んでいたのがであった。

2.1. 二階展示室



図 1 津波博物館の展示写真（2010 年撮影）

齋藤 千恵，アチェにおける自然災害と博物館

来館者は、こうした空間を出ると、水上通路を通って本館に入る。本館2階にはシアターや展示室、津波の絵画室、3階には別の展示室がある。本館に入るまでの空間同様、現在の津波博物館と開館当初の博物館の展示は、部分的に大きく異なる。大きな違いの一つは、2階の展示室から津波犠牲者の遺体写真が撤去されたことである。

2階展示室の展示は、アチェの歴史を示す数枚のパネルで始まる。古い時代のアチェの地図に始まり、アチェの芸能や伝統的家屋、オランダ植民地政府への抵抗や植民地支配を説明するパネルに続き、被災前に激化していた GAM（自由アチェ運動）とインドネシア軍の間の紛争を遺体と髑髏の写真で表すパネルが設置されている。これに続いて被災前と被災後のアチェの地形変化を示す一連の写真、津波直前にあった地震によって崩壊した建物の写真が続く。津波発生時の写真は、走る大勢の子供の写真で印象付けられる。この写真の次に、瓦礫が満ちる海に落ちた男性が船から降りるロープを掴んでいる写真という正に生死の境目を写した強いインパクトをもたらす写真が配置されている。次に、津波の被害の範囲を示す地図や津波前と後の地形の変化を示す写真が展示されている。そして、津波で逃げる人々の写真や津波発生時を示す壊れた時計の写真、子供の遺体を抱いている人たちを写した4枚の写真があり、これらは、津波の発生とその被害が大きいことを伝える。

これらに続いて、犠牲者の体の写真が数枚展示されている。親なのか大人の遺体の上に置かれている子供の遺体の写真、黒くなって腐敗が始まった瓦礫の中の遺体、マットレスの上に置かれた短パンを穿いてシャツがまくれ上がっている遺体、津波に巻き込まれたためか半裸の女性が柵に引っかかった状態で亡くなっている後ろ姿の写真である（図 - 1 参照）。二階の展示室では、これらの写真の前に人々が立ち止まっている姿がよく見られたものであった。

更に遺体の写真は続き、次の一連の写真は、どれも瓦礫の中にある大写しになった遺体のものであった。腐敗が始まり黒くなった遺体を写した写真もある。これらの次に、海が瓦礫と遺体に満ちている写真が3枚続き、男性の水死体の写真の後に、バンダ・アチェ市の中心街にあるホテルの前に津波によって運ばれた船の写真や、市内の様々な場所に波により運ばれたいくつもの漁船、傾いて止まっている自動車、全壊した家や瓦礫の写真が展示されている。涙があふれる目が大写しになった写真に続き、女性が裸の子供を抱きかかえて泣き叫んでいる様子を写した写真、市の中心にある大モスクに大勢の人々が避難している様子の写真がこれに続く。加えて、救助や復旧、援助のためにアチェ外部から様々な NPO や他国の軍が入ってきて活動している様子の多数の写真が展示されている。支援物資を受け取っている人々や瓦礫の中の遺体を探したり、運び出している、布で鼻を覆った人々、瓦礫の中から必要なものを調達しようとしている被災者たち、ビニールで包まれた無数の遺体とその埋葬の様子、伝言が貼られた壁の前にいる少女、破壊された道路や全壊した家々、倒壊したモスクと倒壊しなかったモスクの写真、テントに避難した人々の様子、仮設住宅群、道路の復旧作業、農業や漁業、林業の再開のための準備や、復興の様子

や津波観光スポット建設計画のイラストが展示されている。また、紛争が終結したことを放棄された銃で示す象徴的な写真もある。これらに加えて、展示室の片隅には、いくつかの援助機関による援助の様子が、英語の説明文と共に展示されている。



図2 仮設住宅（右）と津波で全壊したまま放置されている政府建造物（左）仮設住宅の住民が使用しているためにブルーシートで屋根が作られている（2011年撮影）

さて、当時の被災地の様子はというと、復興庁はアチェとニアスの復興宣言をして、現地を後にしているものの、津波により廃墟になった建物が残っていたり、復興住宅を得ることができない人々が仮設住宅に住んでいた。倒壊した建物など津波の爪痕は、まだまだアチェ州都バンダ・アチェを含む被災地に残っていた。津波博物館は、こうした地域に立地し、その内部では被災直後の生々しいとも言える写真を展示していたのであった。

2011年に、この博物館がリニューアルオープンした際には、上記の展示から、遺体の写真が取り去られていた。遺体が写っていても、目立たない写真は、そのまま展示されていたが、遺体が大写しの写真は取り去られてしまっていた。外国人来館者による遺体の写真展示に対する否定的意見が原因であった。

2.2. 三階展示室

三階展示室は、開館当初はあまり来館者の注目を集めていなかった。この展示室は、基本的には、地震と津波の科学的なメカニズムを伝える部屋であった。地球内部やプレートの動きを示したパネルや模型とその解説、地球内部が見える様に一部を切り取った大きな地球儀、インドネシアにおいて過去に生じた津波の分布図、津波発生場所が光る世界地図、地震によって生じる断層の模型、津波が及んだ範囲に赤いランプが灯るバンダ・アチェ市の津波被災分布模型、津波が発生するメカニズムを再現する装置や被災前のバンダ・アチェ市の模型、地震計、起震装置などが設置してあった。被災者たちが当時特に興味を持っ

て見ていたものの一つは、被災前のバンダ・アチェ市の模型であった。被災前のバンダ・アチェ市が当時建っていた家々を含めて再現されている模型を見て、どこに何があったのか、自分の家がどこにあったのか、人々は語るのであった。被災後は津波によって地形が変わってしまっていたし、家々やその他の建物は流され、その後に復興住宅などが建てられていた。



図3 2004年インド洋津波のジオラマ

2011年以降、この展示室に次々と新しい展示が加えられている。来館者の目を引くのは、津波被災の様子を伝える5つのジオラマである。バンダ・アチェ市内では有名な津波観光スポットとなっているPLTDアブン号と呼ばれる巨大発電船が津波で海を流されている様子や「家の上の船」と呼ばれる津波により家の上に乗上げた漁船が津波の中被害を逃れるために甲板に上がった人々を乗せている様子、市の中心にある大モスクが津波による破壊により周囲に何も無くなった中で建っている様子や、地震の際建物が崩れていく様子、そして、大津波がアチェを襲い、人々が逃げまどっている様子のジオラマである（図-3参照）。中でも、映画のワンシーンの様な大津波のジオラマは人気で、その前では、来館者の記念撮影がよく行われている。この他に、三階展示室には、津波遺物として、津波発生時間で止まった時計や津波に巻き込まれたバイクや自転車が加えられた。その数年後に、津波で破壊された扇風機やその他の生活用品、水に浸かって膨張したクルアーン数点が展示されるようになった。

クルアーンの展示と同じころ、JICAの協力のもと、津波避難経路のシミュレーション機器やいくつかのアニメーションプログラムも展示に加えられた。自分がどこに避難すれ

ばよいのか、津波発生から何分で、どの様な手段でどこに避難できるのかということを試すことができるようになった。加えて、いくつも設置されているモニターを通して、来館者は、複数のアニメーションプログラムを見ることができるようになった。この中には、日本と同じ様な非常用持ち出し用品を紹介し避難行動を教えるフィルムや、新しくスマトラ島にも設置された津波警報システムと警報発令に関するアニメーション、津波のメカニズムを説明したアニメーションも含まれている（図 - 4 参照）。

この展示室にあるものは、津波遺物というオリジナルなものを除けば、リアリティのコピーであり、再現されたものである。あるいは、現実に取りべき行動のモデルとされるものである。映画のワンシーンの様なジオラマも、現実を再現したものとして示されている。



図4 津波博物館で上映されている津波警報システムについてのアニメーション⁽¹⁾

3. 津波と非現実

『2012』¹³⁾という映画が、被災地の人々の間で話題になったことがある。これは、終末の日を連想させる地球規模での天変地異の発生が予測され、人々はヒマラヤに向けてサバイバルしようとするストーリーの映画である。この映画では、大地震や大津波が扱われたため、アチェの津波被災地の人々の間で、話題になったのであった。人々は、映画の宣伝を見て、自分たちが経験した、あるいは、被災者から直接聞いた災害、つまり、2004年インド洋津波と重ね合わせていた。

この映画の話の際に人々が口にしたのは、*hari kiamat*(終末の日)という言葉である。イスラム教徒たちは、最後の審判の前に来る終末の日には大災害が地上を襲うと説明する。

多くの地元民がムスリムであるアチェの被災地でも同様であった。2004年インド洋津波も、終末の日と重ね合わされた。「終末の日。悔い改めよ。」と落書きされた全壊家屋もあった。被災者を含め被災地に住む人々の中には、インド洋津波をミニ終末の日と呼ぶ人々もいる。こうしたミニ終末の日と言われるような大災害がいくつも起こり、本当の終末の日に近づいていくと言う。

アチェの人々が経験したインド洋津波は、人類の滅亡をももたらし得る大自然災害と重ねあわせられ、また、未だ人々が見たことがない想像上の終末の日に起こることと重ね合わされている。インド洋津波は、現実には起きたことではあるが、それは非現実と結びつけられているのである。

また、アチェの人々が経験したインド洋津波に関する現実とは、しばしば耳を疑うこととして受け止められる。これは、津波の高さに関する表現にも反映している。被災者たちが、津波の高さを20mという数字で表すとき、この波の高さを信じられない人々も少なくないのである。

津波博物館における津波に関する表現や、被災者たちの被災体験談に出てくる津波の描写は、それを体験していない者にとっては、信じるできないもの、リアリティとは異なると思われるものも含まれる。このため、例えば、津波博物館に新たに設置されたジオラマが、アチェを襲った津波を忠実に再現していても、それは非体験者にとっては映画のワンシーンを模したジオラマの様にも見える。

加えて、被災地に住む人々にとってのリアリティとは異なる展示も存在する。新たに上映され始めたアニメーションの中には、避難の仕方と避難時に持ち出す非常持ち出し袋の中身が紹介されている。日本社会において災害への備えとして非常持ち出し袋の中に入れられる物と似たものがその中身である。一方、バンダ・アチェの被災地では、被災後の何年かは、土地証書と衣類一式を、津波災害の際持ち出せるように用意していたが、現在は、何か持ち出すようにはなっていないと被災地の人々は言う。そうした物を取りに戻る時間が生死を分けることになり得ることから、何も持たずに避難すると言うのである。更に、津波警報発令プロセスを描くアニメーションも、現実とは異なるという人々がいる。インドネシア津波警報システムは、2008年に発足しているが、2012年にアチェで起きた比較的大きな規模の地震の際の警報発令は失敗している。筆者の2016年の調査では、正にインド洋津波のグランド・ゼロと呼ばれ、津波により壊滅的な打撃を被った海辺の村の住民は、津波警報は存在しないと断言するのであった。こうして、被災地の人々や津波を経験していない人々にとって、展示のある物は、リアリティを以って受け入れられていない可能性があるのである。

4. 結び

今まで津波博物館における展示について述べてきた。二階の展示室の主要展示物は、写

真であった。写真が現実を写したものとされるとき、これは、リアリティをそのまま平面上にコピーしたものとなる。したがって、写真により被災の現実は、伝えられる。しかしながら、展示されている写真は取捨選択され、2009年以来の展示において変化している。

何枚もあった津波犠牲者の遺体を大写しにした写真が、2011年にリニューアルオープンした際には、撤去された。展示から、遺体に関連しての、被災のリアリティが切り取られてしまった。では、アチェ州の津波被災地において、犠牲者の遺体が珍しいものであったか、遺体の写真を取り去ってもリアリティをそのまま伝えられるのかといえば、そうではない。被災者たちの被災体験には、様々なところに遺体や本体から離れた人間の身体の一部があったという描写が出てくる。博物館は、現在では、被災後の混沌として危機感を覚えた状況を、全壊した家や瓦礫に覆われた町の写真などで示している。10枚以上あった遺体の写真が撤去されたためか、展示は、復旧、援助、復興という被災後の活動に焦点をあてているような印象を運ぶ。

こうした二階の展示室と対照的なのが、三階の展示室である。パネルやジオラマや模型、来館者が操作できる機器や、災害遺物、アニメーションを映すモニター画面などが存在し、来館者は、地球の構造や地震・津波が発生する仕組みと防災・減災のための努力を知ることができる。ここにあるのは、実際の地球やバンダ・アチェ市、津波などを再現した物である。しかし、実際には、津波を再現したジオラマは、映画のワンシーンの様に、あるいは、スペクタクルの様に来館者に受け取られることがあるし、アニメーションは、リアリティを描いていない近未来の様子のように受け止められることもある。リアルに創られたものにしても、受け取られ方が異なることにより、Brunerが言う様な迫真的な真正性を持つものでも、それを、見る側が本物に忠実に再現されたものと信じることができず、また、パロディの様に見てしまう場合、スペクタクルとして経験されるのである。

注

- (1) アチェ州には、ムスリム人口が多く、また、ある程度の自治が認められていることから、イスラム法が実施されている。津波博物館で上映されているアニメーションには、頭をスカーフで覆った女性が登場し、舞台がアチェであることを人々に認識させる。

引用文献

- 1) Office for Cooperation of Humanitarian Affairs (2005): Indonesia, Sri Lanka, Thailand: Earthquake and Tsunami, *OCHA Situation Report 34*, <http://www.reliefweb.int/node/169972>, 2012.5.3
- 2) Olds, Kris, James D. Sidaway, and Matthew Sparke (2005): White death, *Environment and Planning D: Society and Space*, 23, pp.475-479.
- 3) BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam (2005): *Donatur/NGO Nasional-Internasional* (ドナー/国内・国際 NGO), BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam
- 4) Light, Duncan (2017): Progress in dark tourism and thanatourism, *Tourism Management*, 61, p.281

- 5) Jamal, Tazim and L.Leo (2011): Exploring the Conceptual and analytical framing of dark tourism: From darkness to intentionality (Sharpley, Richard and Phillip Stone eds, *Tourist Experience*, New York, Routledge), p.40
- 6) Lennon, John and Malcom Foley (2000): *Dark Tourism*, London and New York, Continuum
- 7) 前掲 6) p.169
- 8) ブーアステイン、ダニエル(1964):幻影の時代、東京創元社、pp.119, 120
- 9) 前掲 8) pp.19, 20
- 10) MacCannell, Dean (1976): *The Tourists*, London, University of California Press, p.101
- 11) Bruner, Edward (1994): Abraham Lincoln as Authentic Reproduction: A Critique of Postmodernism, *American Anthropologist*, 96 (2), pp.397-415
- 12) Cohen, Erik H.(2010): Educational Dark Tourism at an *In Populo Site*, *Annals of Tourism Research*, 38(1), pp.193-209
- 13) Emmerich, Roland (director) (2009): *2012*, Lavages, Columbia Pictures

国際人間科学部 csaito@m.suzuka-iu.ac.jp

Natural Disaster and Exhibitions in a Museum in Aceh Reality and Spectacle

Chie SAITO

Abstract

This paper discusses the authenticity of exhibitions in the Tsunami Museum in Aceh, Indonesia. This area was severely damaged by the 2004 Indian Ocean Tsunami. The museum is one of the most famous destinations for Tsunami Tourism developed by the Acehnese government and an important educational facility for disaster mitigation and preparedness, which students and pupils in all schools in the capital of Aceh province visit every year. In this museum, some exhibitions have been accepted as realities while some have often been accepted as spectacles although they also reproduce the tsunami reality.

Key Word natural disaster, death, dark tourism, museum, authenticity